

戦後東京都大田区の青年文化運動

― 池田大作のベートーヴェン講義に着目して ―

岩 木 勇 作

はじめに

2024年がベートーヴェン（1770—1827）の交響曲第9番の初演から200周年の佳節に当たることから、同年11月1日～12月27日の期間に創価大学中央教育棟1階のエントランスホールにて「ベートーヴェンと「歓喜の歌」展」が開催された。ベートーヴェンの自筆書簡等の貴重な資料や創価大学創立者の池田大作（1928—2023）のベートーヴェンに関するエピソードが展示されていた。このエピソードの中で、池田が若き日にベートーヴェンに関する講義を「夏季学校」で行ったこと、彼が当時周囲の友人等からベートーヴェン先生と呼ばれていたことが紹介されている。しかし、このエピソードは池田本人の回顧を典拠としたもので詳細は語られていなかった。確認してみると、池田は複数回に亘って、「夏季学校」¹におけるベートーヴェン講義について言及しており、その証言を重ね合わせるとおおよそ以下のことが分かった。

池田大作は、時期としては20歳前後（1947～1949年）、森ヶ崎に住んでいた時に、小学校・中学校の「夏季学校」で教室を担当し、ベートーヴェンについて話をした。会場となったのは当時住んでいた自宅の近くの学校であった。「夏季学校」ではベートーヴェン以外にナポレオンについても話をしていたようで、「夏季学校」は複数回担当したと考えられる。池田は周囲の友人からベートーヴェン博士と呼ばれるほど伝記などを読み込んでいたようである²。

Yusaku Iwaki（創価大学）

¹ 「夏季学校」と同じ意味合いで「夏期学校」という表記もある。本稿では引用等をのぞき「夏季学校」で統一している。

² このエピソードの出典を発表年代順に並べると、①池田大作『広布と人生を語る』第9巻（聖教新聞社、1987年、131頁）、②池田大作『池田大作全集』第75巻（聖教新聞社、1997年、285頁）、③池田大作『新人間革命』第5巻（聖教新聞社、1999年、130～131頁）、④『聖教新聞』（聖教新聞社、2005年10月9日付2面）、⑤『高校新報』（聖教新聞社、2008年8月27日付2面）、となる。「夏季学校」への本人の言及は管見の限りこの5回である。④についてはナポレオンの講義と言及されている。ほか『創価新報』（聖教新聞社、2007年1月1日付5面）では、同紙記者が「池田名誉会長も、21歳のとき、近所の中学校の夏季学校に招かれ、ナポレオンについて話をしている。」と述べている。

以上の太字で示した文章は、池田本人の証言をもとに作成したものである。ただし、この証言だけでは、どの学校で講義したのか、どのような立場で講義したのか、どのような内容を講義したのか等の疑問が残る。本稿は、池田大作が若き日にベートーヴェン講義を行ったという証言を検証し、その歴史的背景を明らかにすることを目的としている。

1. 終戦後の池田大作

1945年8月15日の終戦後、青年たちは価値観の転倒や社会の混迷した状況の中で、どう生きるかという人生の命題に直接向き合わざるを得なかった。池田は当時の心境を「世の中の変わりようは激しかった。真実とは、人間とは……。敗戦により、従来の価値観はひっくり返ったように思われた。何を支柱に生きていくべきか、若者たちは、悩んだにちがいない。私も、その一人であった。」³、「いっさいのもののあまりにも急激な変化のためであろう、何も信じられない、といったような心とともに、しかし、何かを探し求めていたのである。」⁴と述べている。青年たちは、不信感はいまだ拭えないまま、自分の人生を支える何かを求めることになった。

1945年9月15日に文部省が戦後の教育の方向性を示した「新日本建設ノ教育方針」の前文には「文部省デハ戦争終結ニ関スル大詔ノ御趣旨ヲ奉体シテ世界平和ト人類ノ福祉ニ貢献スベキ新日本ノ建設ニ資スルガ為メ従来ノ戦争遂行ノ要請ニ基ク教育施策ヲ一掃シテ文化国家、道義国家建設ノ根基ニ培フ文教諸施策ノ実行ニ努メテキル」⁵とある。これまでの一切が否定され、「文化国家」「道義国家」という方向性が示された。この言葉自体、戦前の帝国主義・軍国主義を否定する意味合いで用いられていただけで、具体的な内容を伴った訳でもなかった。

そして、つづく「― 新教育ノ方針」には「大詔奉体ト同時ニ従来ノ教育方針ニ検討ヲ加ヘ新事態ニ即応スル教育方針ノ確立ニツキ鋭意努力中デ近ク成案ヲ得ル見込デアルガ今後ノ教育ハ益々国体ノ護持ニ努ムルト共ニ軍国的思想及施策ヲ払拭シ平和国家ノ建設ヲ目途トシテ謙虚反省只管国民ノ教養ヲ深メ科学的思考力ヲ養ヒ平和愛好ノ念ヲ篤クシ智徳ノ一般水準ヲ昂メテ世界ノ進運ニ貢献スルモノタラシメントシテ居ル」⁶とある。

以上のことから、戦争や軍国主義の反省、否定から出て来たのが、「文化国家」「道義国家」という方向性であったことや「国体ノ護持」という見解を維持している所に戦後直後の混乱した状況が窺える。戦後の混迷の中で無名の青年たちは、試行錯誤しながら「文化」⁷に向かっていった。「戦争」(武)に相対する「文化」(文)というおおまかな理解は当時の青年にもあったと考えられるが、そこに新しい道を示してくれる誰かがいるわけではなかった。彼らは「文化」の源泉をどこに見出していったのだろうか。若き池田も、そういった悩める青年の一人であった。

³ 池田大作『私の履歴書』聖教ワイド文庫、2016年、73頁。

⁴ 同90頁。

⁵ 文部省編『学制百年史 資料編』帝国地方行政学会、1972年、52頁、傍線筆者。以降も同様。

⁶ 同頁。

⁷ 日本における「文化」の語誌については、柳父章『一語の辞典 文化』三省堂、1995年を参照。

池田大作⁸は1928年1月2日に東京府荏原郡入新井町に生まれる。1930年に糀谷3丁目へ転居。1934年4月に羽田第二尋常小学校へ入学し、1938年に糀谷2丁目へ転居。1940年3月に羽田第二尋常小学校を卒業。同年4月に羽田高等小学校（後に萩中国民学校に改称）へ入学。1942年3月に同国民学校を卒業後、蒲田の新潟鉄工所へ入社。同社内の青年学級で学ぶ。1945年3月に糀谷2丁目の家は強制疎開で取り壊され、馬込のお婆の家に一棟建て直して住む予定だったが引っ越し前の5月24日に空襲を受け、お婆の家も焼けたため、急ごしらえのバラック小屋に住んだ。1945年の終戦後、森ヶ崎（大森9丁目）に転居。新潟鉄工所は閉鎖され、一時的に下丸子にある東洋内燃機に籍をおいた。同年9月に東洋商業の夜間部に中途（二次次）入学⁹。

以上で、池田の終戦までの経歴を簡単にまとめたが、終戦後、森ヶ崎に転居した池田は地域の青年たちと繋がっていった。前述の「新日本建設ノ教育方針」には、「青少年団体」について「学徒隊ノ解散ニ伴ヒ青少年ノ共励組織ヲ欠クニ到ツタノデ新ニ青少年団体ヲ育成スルコトトシタ、新青少年団体ハ従来ノ如キ強権ニ依ル中央ノ統制ニ基ク団体タラシメズ原則トシテ郷土ヲ中心トスル青少年ノ自発能動、共励切磋ノ団体タラシムルモノデアツテ曩ニ学徒隊ノ結成ニ伴ヒ解散セル大日本青少年団ノ如キモノヲ復活スルノデハナイ」とあるが、全国的には地域の青年会や、特に都市部では会社内にサークルが組織されるなど、自主的な青年団体が戦後数多く結成されていった¹⁰。

1945年9月25日付文部次官通牒「青少年団体ノ設置並ニ育成ニ関スル件」を受けて、東京都教育局では、同年10月5日に局長通達を発し、各市郡区に青年団体振興協議会の設置を求めている。こうして終戦後、青年団が再編されていくが、1947年4月に町会が廃止されることによって、町会依存体質の強かった青年団体はほぼ消えてしまい、代わりに自主的な青年団体が組織され始めた。農村的な性格を持つ青年団は歓迎されず、名称も「〇〇団」ではなく「〇〇会」が多かった¹¹。当時の青年たちは、親疎の度合いは別として、地域の青年会、読書サークル、職場のサークルなど複数の青年団体に所属していたと考えられる。青年団体では読書会やダンスパーティーを盛んに行っていた。読書サークルについて、池田は次のように述べている。「戦後の荒廃と虚脱が、思考力まで喪失してしまった人間を生み出す。このような世には、なにかしら抵抗せざるをえない。家の付近に住む二十歳から三十歳ぐらいまでの学生、技術者、工具、公務員など二十人ほどの青年たちが集まって、読書サークルを作っていたが、私もそのメンバーに加わり、人生の指標を探していた。」¹²。森ヶ崎に1946年に発足した読書サークル「郷友会」に池田も参加して

⁸ 本名は「太作」。1948年9月頃には「大作」と名乗り、1953年11月に「大作」に改名。「創価教育の源流」編集委員会編『評伝戸田城聖』下巻、第三文明社、2021年、72頁参照。

⁹ 三代会長年譜編集委員会編『創価学会三代会長年譜』上巻（創価学会、2003年）、池田大作『私の履歴書』（聖教ワイド文庫、2016年）、「創価教育の源流」編集委員会編『評伝戸田城聖』下巻（第三文明社、2021年）を参照。

¹⁰ 引用は前掲『学制百年史 資料編』52～53頁。本稿では「青年団体」を青年団・青年会に限定せず、サークルなども含めた広義的な意味合いで用いている。

¹¹ 東京都立教育研究所編『東京都教育史 通史編4』東京都立教育研究所、1997年、1158頁参照。

¹² 前掲『私の履歴書』86頁。

いた。

2. 戦後東京都大田区の青年文化運動

「郷友会」は森ヶ崎に住む山本毅、茨田鏡次、須山秀吉を中心として 1946 年に作られた読書サークルである。彼らは同年 3 月に貸本屋「草水文庫」を開設している。後に池田は郷友会に参加するようになり、「草水文庫」の運営にも携わるようになった¹³。

「草水文庫」は、戦後の復興のさなか、町中の人々が本を読めるようにとの思いから、山本毅の伯父の経営する富倉製作所の社宅の空き家（大森九丁目南地区）を借りて開設された¹⁴。各自が持ち寄った蔵書に始まり、古本を買い足して、開設時には 500 冊程度の蔵書となった。1 ヶ月何冊借りても 1 人 10 円。会員制の貸本屋の形をとり、収入はすべて本の買い入れにあてられた。店員は山本、茨田、須山、池田の 4 人が交代で行い、夜 9 時まで運営された。文庫に来た子どもたちに勉強を教えることもあったようである¹⁵。

「郷友会」メンバーが運営に関わった「草水文庫」は貸本屋に留まらず、大森第四小学校の図書館へと発展的に解消されることになった。これは、山本や茨田らといった大森第四小学校の同窓生が図書館建設運動として進めていったもので、大森第四小学校の教員でその窓口となったのは出雲路猛雄、鈴木忠である。同窓生らは、図書館建設の資金集めのため、ダンスパーティーやバザーなど様々な企画を考えて行っている¹⁶。出雲路は「郷友会」メンバーを「草水文庫」を利用する子どもたちを通して知っていった。彼らと交わるにつれ、「若い者達の知識欲や真実への探求はいつか「図書館を創ろう」という一つの目的を持つようになっていった。これは全く新し

¹³ 郷友会については、前掲『私の履歴書』（86 頁）に後から加わったと解釈できる記述がある。草水文庫についても、同人誌『めだかの学校』（1988 年 7 月に創刊された同人誌。島田ばくを中心に集まった 20 数名の同人による）収録の奥嶋紘「青春讃歌 草水文庫（二）」には、「店員は、毅、鏡次、秀吉、そして後から加わった大作らが交替であつた。」（『めだかの学校』第 73 号、2000 年）とあるので後から参加したものと考えられる。『めだかの学校』については池田大作記念創価教育研究所所蔵資料を閲覧。

¹⁴ 読書会や読書サークルを運営するにしても、本が集まらなければ始まらないため、青年団体が主導して地域に図書館や文庫を作るという試みは全国各地で行われたようである。戦後の読書会に関する記事を収録している、山本武利監修・土屋礼子編『占領期生活世相誌資料Ⅲ メディア新生活』（新曜社、2016）の 180～209 頁を参照。たとえば、大田区でも、大森の青年団体である池上雅樹会では、日比谷図書館からの借入、会員持寄り、池上雅樹会の蔵書、合わせて 400 冊を会員が読めるようにと「池上青年文庫」を開設している。（大田区役所教育課文化係河原平八郎編『大森青少年団体だより』No.1、大田区役所、昭和 24 年 6 月 6 日、4～6 頁参照。国会図書館憲政資料室所管資料：VH1-O76）。

¹⁵ 「草水文庫」の詳細については前掲『めだかの学校』の 71 号（2000 年 3 月）～82 号（2002 年 1 月）に掲載された奥嶋紘「青春讃歌」を参照。同作品は、『山本毅追悼集』（めだかの仲間、2011 年）にも収録されている。ほか図書教育研究会編『学校図書館の実際』（文民教育協会、昭和 24 年、95 頁）、「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝戸田城聖』上巻（第三文明社、2019 年、112～113 頁）でも言及されている。

¹⁶ 詳細は、前掲『めだかの学校』に収録の奥嶋紘「青春讃歌」や出雲路猛雄「大森第四小学校の場合」（図書教育研究会編『学校図書館の実際』文民教育協会、1949 年、93～111 頁）を参照。ちなみに当時、同校の校長を務めていた鈴木磐雄は、東盛小学校および白金小学校の牧口常三郎校長時代に訓導として在職していた人物と考えられる。明治教育社編『下谷繁盛記』（明治教育社出版部、1914 年、183 頁）と東京市編『昭和御大礼奉祝志』（東京市、1930 年、527 頁）を参照。

い働く者達のアカデミヤであり、しかも具体的な創造の目標を持つた仕事であつたのである。」¹⁷と、青年らとの交流の中で、図書館建設という目的が形成されていったと述べている。

同窓生らは、1948年6月頃から図書館建設の資金集めを計画。ダンスパーティーや同年9月19日にバザーを開催し資金をあつめ、一通り資金集めが終わった段階で、図書館建設運動は「大森第四小学校図書館設立委員会」が担うことになった。この構成員は学校職員と同窓会青年となっている¹⁸。同年10月24日、委員会のメンバーは海苔とり舟で図書等を神田まで購入しに行っている¹⁹。同年11月に大森第四小学校図書館への発展的解消として「草水文庫」が閉店。「草水文庫」の蔵書は同図書館に寄贈された。同図書館は1部の朝7時30分～夕方5時までは大森第四小学校児童が利用し、2部の夕方6時から夜10時まで（季節によって変動あり）は会員証を発行された地域の青年などが利用した²⁰。

大森第四小学校の同窓生（6回生）の平林義正は、海苔とり舟で神田まで図書等を購入しに行ったメンバーである。平林は、大森第四小学校の『創立二十年記念誌』に、「文化の泉（大森第四図書館設立当時のこと）」という文章を寄せている。平林によれば、図書館は「文化の泉」であり、図書館建設運動のキーワードは「文化」であった²¹。

池田は、1946年に昭文堂印刷へ入社。1947年頃に「郷友会」に参加。「草水文庫」の運営にも関わった。1947年には昭文堂印刷を退社し、しばらく休養する。同年8月14日に友人から「生命哲学についての会」があると誘われて「郷友会」のメンバーを連れて参加した。ここで生涯の師と仰ぐ戸田城聖（1900—1958）と出会い、10日後に創価学会へ入会する。同年9月に蒲田工業会へ入社。1948年3月に東洋商業を卒業し、同年4月に大世学院政治経済科夜間部へ入学する。池田は、「郷

¹⁷ 前掲『学校図書館の実際』96頁。

¹⁸ 前掲『学校図書館の実際』97～99頁参照。池田は図書館建設運動には直接的に関わっていないと考えられる。同書によれば、「バザー運営委員会」の構成員は「学校職員・父母の会幹事、同窓会青年達」と記述されているし、1948年9月19日のバザーの後に「資金の獲得を一応完了した吾々は、バザー運営委員会として運んで来た図書館建設運動を更に、「大森第四小学校図書館設立委員会」と切変えることになった。若干のメンバーが入れ変わり、構成は学校職員と同窓会青年たちを以てした。」（同97～99頁）とあるからである。同様に「大森第四小学校の卒業生ではないという事で、図書館づくりには係わらなかった大作にとって、草水文庫の閉店は、青春時代の一場面を切り取られる思いだった。」（奥嶋紘「実りの秋」『めだかの学校』第81号、2001年）ともある。

¹⁹ ちなみに、大森第四小学校の図書（各種全集）等の購入のため、神田まで行った海苔とり舟は、伊東家のものを借りたようである。『創立二十周年記念誌 東京都大田区立大森第四小学校』（山沢善四郎、1953年、69頁）および元大森海苔漁養殖業者＋編集委員会編『海苔のこと 大森のこと』（ノンブル社、2010年、144頁）を参照。大森第四小学校の記念誌等の資料については、東京都大田区立大森第四小学校にて閲覧させていただいた。お忙しいなか対応して下さった長町正弘校長ならびに諸先生方にこの場を借りて感謝申し上げる。また、大森の歴史について情報提供して下さった、川崎一彦氏、塩原将行氏、高橋勝氏に感謝申し上げる。

²⁰ 前掲『学校図書館の実際』108～111頁参照。

²¹ 前掲『創立二十周年記念誌 東京都大田区立大森第四小学校』、66～70頁。ほか、大田区史編さん委員会編『大田区史』下巻（東京都大田区、1996年、659～662頁）を参照。図書館建設に、初代大田区長（1947年4月～1948年7月まで務めた）の小沼虎之助の尽力もあったことが触れられている。彼は1946年まで大森第四小学校の後援会会長をしていた。

友会」や「草水文庫」には関わっていたが、同窓生ではなかったため、大森第四小学校の図書館建設運動にはほとんど関わっていなかったと考えられる。同年 11 月に「草水文庫」が閉店した後、同年 12 月に蒲田工業会を退社し、翌年の 1949 年 1 月に戸田が経営する日本正学館へ入社している。1950 年には、大森新井宿のアパートで一人暮らしを始めた²²。

当然のことながら、読書サークル「郷友会」の会場として、「草水文庫」は使用されていたろうし、この二つは切り離せない関係にあったことが窺える。「草水文庫」の閉店は、「郷友会」のメンバーにとって大きな出来事であったろうし、別の居場所やつながりを探す契機にもなったであろう。このような自主的な青年たちのつながりは、転居、転職等様々な出来事によって、その都度、形成され、解けていくことになるのである。

3. 「夏季学校」とは何か

本稿冒頭において、池田の証言として「小学校・中学校の夏季学校」でベートーヴェン講義を行ったことを確認した。小学校、中学校のどちらも会場として上がっているのは何故だろうか。これは終戦後、大田区の中学校のほとんどが独自の校舎を持たず、小学校を仮校舎としていたことによると考えられる。六・三・三制が始まってすぐの 1947 年 5 月時点における状況を確認しておきたい。

表 1 1947 年 5 月時点の大田区立中学校の設置場所

校名	位置	開校時期
大森第一中学校	区立大森第五小学校内	1947 年 5 月 3 日
大森第二中学校	同 入新井第一小学校内	同
大森第三中学校	同 入新井第二小学校内	同
大森第四中学校	同 入新井第四小学校内	同
大森第五中学校	同 馬込小学校内 同 馬込第二小学校内	同
大森第六中学校	同 赤松小学校内 同 清水窪小学校内	同
大森第七中学校	同 東調布第一小学校内	同
大森第八中学校	都立大森実践女学校内	同
大森第九中学校	同 雪ヶ谷高等女学校内	同
大森第十中学校	区立久原小学校内	同
東蒲中学校	都立大森中学校内	1947 年 5 月 3 日矢口小学校で開校
萩中学校	区立都南小学校内	1947 年 5 月 7 日
出雲中学校	同 矢口小学校内	1947 年 5 月 5 日
高畑中学校	同 六郷小学校内	同
御園中学校	旧公立青年学校校舎・矢口実践女学校舎	同
新宿中学校	区立矢口西小学校内	1947 年 5 月 7 日

出典：『大田区の歩み』東京都大田区総務部広報課、1970 年、170 頁をもとに筆者作成

²² 前掲『創価学会三代会長年譜』上巻、『私の履歴書』、『評伝戸田城聖』下巻、を参照。

表1を見れば1947年5月時点で、ほぼすべての大田区立中学校が独自の校舎を持っていない状態であることが分かる。大田区立の新制中学校は1947年に開校し、そのほとんどが小学校の校舎を仮校舎としている。池田の証言の「自宅の近く」は森ヶ崎（大森9丁目）の学区であれば、大森第四小学校（大森9丁目）、大森第一中学校が相当する。大森第一中学校は、新制中学として1947年3月に創立されるが、独自の校舎は無く、同年5月に大森第五小学校内の校舎（大森1丁目）で開校した。大森第一中学校の新校舎（森ヶ崎町）の落成は1950年2月である²³。池田の証言が、小学校、中学校のどちらかに断定できないのも理解ができる。

次いで、「夏季学校」について確認しておく。戦後の社会教育の基本的な方針は、1946年4月の第一次アメリカ教育使節団の報告書を受けた、同年5月の「新教育指針」で発表されている。その社会教育の項目で、公立図書館、博物館が取り上げられ、諸学校における夜間部設置、学校開放などが例示されている。また、1947年3月に教育基本法・学校教育法が制定されており、教育基本法第7条および学校教育法第85条では社会教育の文脈で、学校施設の利用について言及されている。

学校開放（または学校拡張）とは、梅根悟によれば、「学校のやる仕事を生徒・児童の教育だけに限らないで、ひろく社会の人々の教育のために役立つようにひろげようというのです。（中略）今日わが国で行われている学校拡張事業には、主として学校拡張講座と通信教育の二種類があります。学校拡張講座というのは学校の教師が社会人のためにある期間続けて講義をする仕組で、専門の学科について数箇月にわたる講義をするもの、夏休みを利用して勤労者を相手に行うもの（夏期学校）、割合に短い期間で、専門のことでなくひろく豊かな教養をつちかう目的で行うもの（文化講座）、母親をはじめ一般社会人を相手にして平易に各方面のことにわたって教育しようとする社会学級、などがあります。このうち初めの三つは、主としてこれまでの大学や専門学校・旧高等学校でやっているものですが、最近は中等学校でもこの種の講座を開いてます。また最後の社会学級は主として小学校でやっているものです。」²⁴と説明されている。

「初めの三つ」とは、専門の講義、夏期学校、文化講座をさしている。最近は、中等学校でもこの種の講座を開いているとするが、これは文部省が、1947年6月26日に通知した「中学校における学校開放講座の開設について」に基づくものである。この通知では、都道府県毎に3校まで予算を付けること。講師の条件は「委嘱先学校の教職員のみに限定せず、他の学校の教職員及び広く一般学識経験者の中からも適任者を選ぶこと」と教員のみならず学識経験者も対象となることが窺える²⁵。この夏期学校の講師に無名の青年を選ぶということは現実的には考えられないだろう。

²³ 『大田区史』東京都大田区役所、1951年、757～810頁参照。大森第一中学校については、同校HPの沿革も参照。<https://www.ota-school.jp/oomoridail-js/guide/history.html>（2025年2月10日閲覧）。

²⁴ 梅根悟『教育制度』三省堂出版、1949年、111～112頁。

²⁵ 宮原誠一編『資料日本現代教育史1』三省堂、1974年、552～553頁。

以上のように社会教育行政的な文脈における夏期学校を確認したが、この講師として池田青年が招待されたということは考えにくい。また、前掲『大田区史』(1951 年度版)の 821 ～ 830 頁には、区が社会教育として実施・奨励した 1947 ～ 1951 年度までの講座の一覧が掲載されている。一覧の中には、池田が担当したと見られる講座は確認できない。大田区の広報である『大田区政ニュース』(第 112 号から『大田区報』に改称)からも該当する講座は確認できない²⁶。区行政が主催する社会教育講座の講師には、概ね有識者や大学教授などの肩書きを持った人物が講師として挙げられている。無名の青年が抜擢されるというのは現実的ではない。とはいえ、無名の青年が講師として招かれる場が絶無かというところでもないのである。可能性として考えられるのは、青年団体が主催する「夏季学校」に池田が講師として招かれたというものである。

大森第四小学校の同窓生の証言によれば、同窓生は図書館建設運動に従事する一方で、サマースクールを開いていたようである。同校の 50 年誌である『いそじ』には、次のような証言がある。「司会〔平林和久〕 戦前、同窓会は毎年総会が開かれていたと思います。たしか昭和十八年に卒業生の中で、兵隊に行く人が多くなり、壮行会を開いたりしたのが、最後だったと思いますが、戦後の活動は。 大野〔恵男〕 何しろ物資不足のおりで、同窓会どころではなかったですが、卒業生が中心になって、夏休み中に、学校で、勉強を教えるサマースクールを開いたりしていました。 野口〔房一〕 私たちは勉強を教えてもらったほうです。 荒谷〔志朗〕 七、八、九、十回卒の人たちがやっていました。大野〔恵男〕 そのころ、六、十一、十二回卒の人たちが中心になって、舟で神田まで、古本を買いに行き、図書館を開設しました。あれはとても好評でした。」²⁷

1948 年頃の大森第四小学校の同窓生は、7 ～ 10 回生がサマースクールを開き、6、11、12 回生が神田まで古本を購入しに行くといった役割が分担されていた。「郷友会」の中心メンバーである山本毅と茨田鏡次は共に 7 回生であり、サマースクールを担当している²⁸。

池田は『完本 若き日の読書』²⁹において、「そこ〔郷友会〕で私たちは偉人の伝記を読み合っ

²⁶ 『大田区政ニュース』および『大田区報』は大田区役所で閲覧させていただいた。

²⁷ 創立五十周年記念誌編集委員会編『いそじ』東京都大田区立大森第四小学校、1984 年、49 頁。

²⁸ 前掲『創立二十周年記念誌 東京都大田区立大森第四小学校』133 頁参照。サマースクールは 1948 年のみでなく、1949 年も行われていたようである。同書の山沢澄夫の証言として、「私が図書館に関係し始めたのは、昭和二十四年の夏で、丁度図書館が、運営資金調達の両面に支障を来し始めた頃でした。当時は、七回生の Y 氏〔山本毅〕が図書館の運営に協力し、九回生が同窓会の当番幹事として、これに助力し、夏期学校、文化祭等大いに成果を挙げておりました。」(72 頁)とある。ほか大森第四小学校同窓生を中心とした明瞳同人会の同人誌『明瞳』には、平林武「チャンチャラオカシイヤイと言ふこと」という文章の中に「去年の夏であったか図書館の設立資金徴集の一方策として「サンマー・スクール」の実施を同窓会幹事会の席上で私が提案した折痛感した事が二、三あるから、それを日記から拾ひ集めて過去の事ながら吾々の歩み行くべき態度に何らかの示唆あらん事を考へて記す事にする。」(『明瞳』第 1 号、1949 年 2 月、24 頁)とある。また、同第 7 号の凡太郎「校長を送る」の文章の中に「さして古いことではないが、二四年の夏九回生が同窓会の主体となつてサンマー・スクールが開かれた事があつた。」(1952 年 11 月、18 頁)ともある。『明瞳』については、池田大作記念創価教育研究所所蔵資料を閲覧。

²⁹ 池田大作『完本 若き日の読書』第三文明社、2023 年。絶版となっていた『若き日の読書』『続・若き日の読書』を合本し、巻末に特別収録の「読書ノート」を収録して、2023 年 1 月に出版された。

たり、日本の将来の動向や経済体制について、それこそ真剣な討議も重ねていた。私の「読書ノート」は、その会合のための討議資料ともなった。³⁰と証言している。池田はザラ紙のノート（「雑記帳」）に、本の抜書などを書きとめていた。そうしたメモや抜書が、「郷友会」の討議資料にもなったようである。この「雑記帳」の中には、多くの本の抜書が記載されているが、これは原文通りのものもあれば、原文を改作したようなものも含まれている。「雑記帳」の抜書は、その一部が、「読書ノート」（一）～（六）として『第三文明』（第三文明社）の1964年3～8月号に掲載された。前掲『完本 若き日の読書』の巻末には、『第三文明』の掲載分および未掲載分の原稿を含めて「読書ノート」として収録している。

つまり同書に収録されているのは「雑記帳」のごく一部に過ぎないわけであるが、2024年に創価大学で開催された「ベートーヴェンと「歓喜の歌」展」では、同書で確認できない「雑記帳」の一部である、ロマン・ロラン著、高田博厚訳『ベートーヴェン』叢文閣、1928年（普及版1935年）に該当する抜書が展示されていた。抜書されていたのは冒頭の文章で、「大気はわれらの周囲に重苦しい。老いたる欧羅巴は鈍重な汚れた雰囲気の中に麻痺してゐる。威厳もなき唯物主義は思想に押し懸り、政府や個人の行為を妨げてゐる。世界はその抜け目ない陋劣な利己主義の中に気を失つて死ぬ。世界は窒息してゐる。——窓を開け放たう。自由な空気を入らしめやうではないか。英雄の息ぶきを呼吸しやうではないか。／人生は苦難である。彼女は、魂の凡庸さに己れを委し去ることをしない者に取つては、日毎の闘争である。」³¹の箇所である。

これによって若き日の池田は、高田博厚訳『ベートーヴェン』を読んでベートーヴェンの生涯を学んでいたことが分かるし、この偉人の伝記を資料として、「郷友会」メンバーと議論していた可能性が考えられる。こういった議論を経て、池田はベートーヴェン博士と呼ばれ、その知識量や話の面白さを見込まれて、青年らが企画した夏季学校（サマースクール）の講師としてベートーヴェン（あるいはナポレオン）の講義を行ったのではないだろうか³²。

読書サークル「郷友会」以外の関わりも検討すべきであろう。奥嶋紘「青春讃歌 下村湖人と青年団」³³では、1948年頃に、青年団の活動が活発化し、山本毅は、青年団活動に参加して、野

³⁰ 前掲『完本 若き日の読書』81～82頁。ほか読書サークルで、ベスタロッツ『隠者の夕暮・シュタンツだより』、ダンテ『神曲』を読んだという証言もある。前掲『完本 若き日の読書』104、223頁参照。

³¹ 前掲『ベートーヴェン』1～2頁。展示された「雑記帳」の抜書は原文のママではない。

³² 「郷友会」での議論は池田にとって大きな触発になっていた。池田は「ベスタロッツの『隠者の夕暮・シュタンツだより』」を最初に岩波文庫版で読んだのは、たしか自宅近くの読書サークルに参加していたときのことである。新生日本の民主教育のあり方について、友人と夜を徹して議論した記憶もある。／そのときの「読書ノート」や、友人たちとの議論をもとにして、私はベスタロッツの生涯をスケッチしたのである。なにしろ校了間際の短時間のうちに、一気に書き上げてしまったものだ。今では到底、公にはできない出来ばえであるが、これが活字となった初期の短文として、私には思い出深いものとなっている。」（前掲『完本 若き日の読書』104頁）と述べている。池田の活字化された初期の文章にも「郷友会」の影響があったことを告白している。この「ベスタロッツ」の文章については、伊藤貴雄「『少年日本』掲載の山本伸一郎「ベスタロッツ」について」（1）・（2）（『創価教育研究』第4号および第5号、創価教育センター、2005および2007年）において詳細に論及されている。

³³ 前掲『めだかの学校』第74号、2000年。

球チーム作成、ダンスパーティーを開催したことが触れられている。また、この青年団は町ごとの活動であり、山本は青年団活動に通じている下村湖人にアドバイスを聞きにいったという言及もある。前述の通り、青年たちは複数の青年団体に所属して様々な活動に従事していた。大森第四小学校の図書館建設運動のメンバーを中心として発足したサークル「明瞳同人会」は、同人誌『明瞳』第1～30号（創刊は1949年2月20日）を発行している³⁴。『明瞳』からはいくつかの青年団体の存在を確認することができた。大田区には、雑誌『平凡』（凡人社）の読者の集まりが元となった「海岸サークル」（会員約1000名）の存在³⁵や、大森青年会（会員約200名）³⁶があった。同地域に住んでいた池田青年も大森青年会に所属していた可能性は高い。1948年の『大森青連ニュース』創刊号を見ると、大森の青年団体が34リストアップされている。1948年11月時点でリストにあげられた青年団体は次の通りである。大森一青会、澤青会、若葉青年会、大森三丁目青友会、大森三丁目浅間会、交友会、貴船青年会、三輪青年会、大森青年会八丁目西、大森青年会八丁目東、翠会、入新井三丁目子供会、防犯協会入新井第五部青年会、入新井文化会、山王青年文化会、山王二丁目青年会、木原山青年会、春日会、いづみ会、新井宿五丁目青年会、新井宿六丁目青年会、馬込東三丁目青年会、馬込若草青年会、馬黎明青年文化会、昭青会、親友会、南青文化連盟、桐里青年会、市野倉青年会、堤方青年会、若草会、堤方西青年会、池上本町雅樹会、池上徳持北青年文化会³⁷。

また大田のローカル紙である『新国民新聞』には、「『若葉会』の人達の『はたらき』」の見出しで「アチコチで、緑蔭子供会或はサンマー・スクール等活発な青年会の催しが行はれたが、これは蒲田糺谷の、奮起する「若い人」の話。」³⁸とある。サマースクールは青年会の活動としても行われていたようである。

以上のように青年団体が夏季学校（サマースクール）を主催することがあったことが分かる。池田が自宅近くの小学校・中学校で、20歳前後に行ったベートーヴェン（あるいはナポレオン）の講義は、青年団体が主催した夏季学校（サマースクール）に招かれて行われたものだったと推測することができる。

³⁴ その後継誌として、同人誌「めだかの学校」第1～100号、同人誌「めだかの仲間」（第1～21号）がある。

³⁵ 久保田正文「その風とその光と」『明瞳』第20号、1956年12月、5～6頁。東京南部のサークル文化運動とサークル誌については、浜賀知彦編『戦後東京南部の文学運動』第1～11輯（南部地域文学研究会・東京南部文学運動研究会、1997～2005年）および城戸昇著・道場親信編『東京南部サークル文化運動史 年表・記録』第1～2巻・別巻（金沢文圃閣、2017年）が詳しい。

³⁶ 茨田鏡次「綴方青年会」『明瞳』第2号、1951年11月、20頁。茨田はここで大森青年会が解散したことを報告している。

³⁷ 『大森青連ニュース』創刊号、大田区大森青年団体連絡協議会、1948年11月22日付1面。国会図書館憲政資料室所管資料：VH3-O18。34団体のうち「大森青年会」に該当するのは、「大森青年会八丁目西」「大森青年会八丁目東」である。「九丁目」は確認できなかったが、その後「大森青年会九丁目」が誕生したかは不明。ただし、茨田の証言によれば1951年に大森青年会は解散している。また、1949年6月時点までに、馬込西三丁目新友会、大森二丁目子供会、入新井若竹子供会、大田区仲町子供会、馬込文化読書会などが誕生している（前掲『大森青少年団体だより』No.1、1～12頁参照）。

³⁸ 『新国民新聞』新国民新聞社、1947年9月1日付1面。国会図書館憲政資料室所管資料：VH3-Sha107。

4. ベートーヴェンの伝記と語られたエピソード

残る疑問は、池田が20歳前後に「夏季学校」で、どのようなベートーヴェン講義を行ったのかであるが、ひとまず本人が直接、「夏季学校」と結び付けて語った以下の2つのエピソードを紹介しておきたい。

① 1990年11月16日

よく知られているように、そのころベートーヴェンの耳は、ほとんど聞こえなくなっていた。「第九」の初演の際、聴衆の万雷の拍手も彼の耳には届かず、教えられて、初めて人々の大歓声に気づき、お辞儀をした——という話も伝わっている。

こうしたことを、私は戦後の青年時代、自宅近くの中学校の夏季学校で、招かれて講義したことを思い出す。ベートーヴェン博士と呼ばれるほど、彼の音楽と生き方に傾倒していたわけである。³⁹

② 2008年8月27日

私は戦後の青春時代、自宅の近くの中学校の夏季学校に招かれて、音楽の大英雄ベートーヴェンの講義をしたことがあります。その講義で語った一つの結論の言葉を、きょうは、大切な皆さん方に贈ります。

「苦悩を突きぬけて歓喜を勝ち得るのだ」と。⁴⁰

①は、ベートーヴェンの交響曲第9番初演時のエピソードである。②は、ロマン・ロランがベートーヴェンの生涯の叙述を結ぶにあたり引用した彼の言葉である。この2つのエピソードから、池田のベートーヴェン講義を再構成する力量を本稿筆者は持ち得ないので、ここでは池田がベートーヴェン講義を行うにあたり資料として閲覧することができたであろう伝記類を列挙しておくに留めたい。以下、伝記類を日本語文献に限定し、出版年順に並べた⁴¹。

1. ロマン・ロラン『ベートーヴェン』高田博厚訳、叢文閣、1928年（普及版1935年）
2. パウル・ベッカア『ベートーヴェン』大田黒元雄訳、第一書房、1931年
3. 梅津勝夫編訳『ベートーヴェンとゲエテ』、叢文閣、1934年
4. ルネ・フォシュア『愛のベートーヴェン』増富平蔵訳、第一書房、1938年
5. ロマン・ロラン『ベートーヴェンの生涯』片山敏彦訳、岩波文庫、1938年
6. 長谷川千秋『ベートーヴェン』岩波新書、1938年
7. アンドレ・エヴジイ『愛の人ベートーヴェン』長松英一訳、日新書院、1940年

³⁹ 1990年11月16日に行われた創価学会の第35回本部幹部会・第三回東京総会におけるスピーチ。前掲『池田大作全集』第75、285頁。

⁴⁰ 『高校新報』聖教新聞社、2008年8月27日付2面。

⁴¹ 民音音楽博物館に所蔵されている貴重なベートーヴェンの伝記資料等を閲覧させていただいた。対応してくださった同館の野沢晃館長にこの場を借りて感謝申し上げます。

8. アントン・シンドラー『ベートーヴェン』清水政二訳、古賀書店、1941 年
9. 属啓生『ベートーヴェンの生涯』三省堂、1942 年
10. 河上徹太郎『新伝記叢書 ベートーヴェン』新潮社、1942 年
11. A.W. セイヤー『ベエトオヴェン伝』相良末夫、第 1・2 巻、梁塵社、1942 ～ 1943 年
12. ヴァンサン・ダンディ著『ベートーヴェン』富士原清一訳、新太陽社、1943 年
13. ロマン・ロラン『ベートーヴェンの生涯と思想』柿沼太郎訳補、高山書院、1946 年
14. ロマン・ロラン『ベエトオヴェンの生涯』井出則雄訳、霞ヶ関書房、1946 年
15. 黒沢隆朝『ベートーヴェンの生涯』音楽之友社、1948 年
16. 諸井三郎『楽聖伝記叢書 4 ベートーヴェン』文体社、1948 年
17. 『ロマン・ロラン全集』第 37 巻、みすず書房、1949 年

以上、17 点の伝記類を列挙した。1 の高田博厚訳については、前述の通り「雑記帳」の抜書から読んでいたことが明らかとなっている。とはいえ、②のエピソードでの「苦悩を突きぬけて歓喜を勝ち得るのだ」という表現と、高田訳の「悩みを通じての歓喜」（普及版 106 頁）には表現に違いがあることに注意されたい。また、池田が語った①のエピソードの「お辞儀」に着目すると、出典として合致しそうなものは 6. 「不器用な挨拶をした」（前掲長谷川『ベートーヴェン』141 頁）、9. 「お辞儀をした」（前掲属『ベートーヴェンの生涯』386 頁）、15. 「礼をした」（前掲黒沢『ベートーヴェンの生涯』212 頁）、辺りと推定できるが⁴²、結局のところ、この①②のエピソードは当時を振り返った回顧的な語りの中で言及されたものであるため、20 歳頃に読んだ伝記類の表現をそのまま反映しているとは言えず、あくまで参考程度に留まる。

もう一つ言えることは、池田はベートーヴェンの人格的側面を入り口としてベートーヴェンに興味を持ち、ベートーヴェン博士と呼ばれるようになったということである。池田は、「私は面倒な音楽理論や、もっともらしい音楽解説書には、まったく縁のない音楽愛好者にすぎない。数々の曲の選択基準は、好きか、嫌いかという単純素朴な気持ちの判断にまかせている。嫌いな曲は顧みない。好きな曲は飽くことを知らない。」⁴³、また「[大森のアパートで一人暮らしをして

⁴² ほか「わずか一小節を創作するにも、精魂を傾けたことを示す、有名なエピソードがある。ある旋律を直すために、五線紙の上に新たな紙を貼って書き改めた箇所を、ある人が順にはがしてみると十三枚あったが、完成された旋律と一番下にある最初の旋律とが全く同じであったという。彼の曲のいかなる小節でも十二回以上直されないものはないという逸話と併せて、それは彼の努力を語り、最初の旋律と最後が同じであったことは、豊かな天分を代弁している。」（池田大作『私の人物観』潮出版社、1978 年、50 頁）の話は、「曲は、スケッチによつて、最初のモチーフから、徐々に変形し、一から他を生じ、しかも組織的に、まるで植物のやうに生長して行く。気に入らない時は、何回でも出直す。かうした彼のスケッチを調べた後の世の人々が確信をもつて云ふところによれば、彼の曲の一小節にして、十二回以上書き直されないものはない、とさへ云はれてゐる。彼は如何なるものが如何なる場所に納まるべきかについて、非常に注意をし、迷ひ、逡巡した。メンデルスゾーンの話である。ベートーヴェンが、ある箇所を直す為に、書き改めては、その上に貼り付けて、十三枚も貼り付けてあるところを、メンデルスゾーンは、順々と一枚ずつ剥がして行つて見たところが、十三枚目で、最後の完成した時に書いたと同じ楽句が表はれて来たのを発見したと云ふ。」（長谷川千秋『ベートーヴェン』岩波新書、1938 年、64 頁）が出典と考えられる。

⁴³ 池田大作『池田大作全集』第 18 巻、聖教新聞社、1989 年、62 頁。

いた頃] 私は渴して泉を求めるごとく、音楽を求めたのである。なけなしの財布をはたいて手回しの蓄音機を買い、夜半や日曜の朝にはレコードを友人に借りては、音の世界に浸った。次から次へと、名曲を聞き漁った。」⁴⁴と述べている。大森のアパートで一人暮らしをするのは1950年頃からであり、その時期から名曲を聞き漁ったとのことである。それ以前にも、友人宅等でレコードを聞くことはあったかも知れないが、森ヶ崎にいる頃（1945～1949年）に既にベートーヴェン博士と呼ばれていた池田のベートーヴェンへの傾倒および受容は彼の伝記類を読むことから始まったと推測できる。

おわりに

本稿は、創価大学創立者の池田大作が若き日にベートーヴェン講義を行ったという証言を検証し、その歴史的背景を明らかにすることを目的としていた。証言を裏付ける確定的な根拠を発見するには至らなかったが、池田本人の証言を、周辺資料をもとに検証し、蓋然性のある結論にたどり着くことはできたと言えるだろう。

池田がベートーヴェン講義を行ったのは、時期としては20歳前後（1947～1949年）である。戦後、森ヶ崎に住んでいた時期（1945～1949年）に、自宅近くの小学校あるいは中学校を会場とした「夏季学校」で教室を担当し、ベートーヴェンについて話をした。当時、大田区立の中学校のほとんどが小学校内に仮校舎を設置して開校している状況だった。池田は、地域の青年団体が行っていた「夏季学校」に講師として招かれてベートーヴェンの話をしたようである。ベートーヴェン以外にナポレオンについても話していたようで、「夏季学校」は複数回担当したと考えられる。池田は周囲の友人からベートーヴェン博士と呼ばれるほどロマン・ロランの著作を始めとしたベートーヴェンの伝記類を読み込んでいたようである。

今後の課題としては、1945～1950年頃までの地域史資料の丹念な掘り起こしが必要である。大田区の青年会誌やサークル誌もこの時期は不十分な形でしか確認できていない。本稿では、池田のベートーヴェン講義への着目を起点として、戦後東京都大田区の青年文化運動を捉えていたが、限定的なアプローチに留まらざるを得なかった。青年らの交流の様子や戦後の青年らに共通する心性の解明が、青年文化運動の理解を深め、若き日の池田を理解する上でも重要な視点になると考える。本稿作成にあたって、貴重な資料閲覧の機会を得る事ができたことを関係者各位に改めて感謝申し上げる。

⁴⁴ 前掲『私の人物観』、46頁。